「當りまへや、川に鯨が居るかいな」
「それでも此の間乾物屋の表通つたら、かわ鯨と書いてあつた」
「あれは皮鯨やないかいな、弄物に仕られてるね、情無い人やなお前はんみたいな頼無い人と一生添ふていかんならんかと思ふと、情無うなつてくるは」
「何んでも構へん、飯を食べさせて」
「御飯を食べさせてと云ふても、御飯があらへん」
「焚くお米が何處にあるいな」
「焚んかいな」
「オホツ……、腹はペコ〳〵やは、飯は無い、米は無いはとするとどうなりますので」
「精出して働きなはれ、錢さへ儲けてやつたら、どんな物でも食べさしてあげる」
「嬶、どうぞ頼む、明日から心を入れ替へて働くよつて、今日だけ飯を食べさして」
「情無い人やな、そんなら隣の源さん所へ行つて、妾が云ふてると云ふて一寸三十錢程借つといなはれ」
「あかん、私が此の間三錢借りに行つたら、貸せんとボロ糞に云ひやがつた」
「妾が云ふてると云ふたら貸してくれてや、さう云ふて行つといなはれ」

「ヘイ……源さん、嬶が云ふてるね、一寸錢三十錢貸してんか」
「お咲さんが三十錢貸せと云ふのか、三十錢でえゝか五十錢貸そか」
「コラ源助」
「何んぢや眼をむいて」
「私が三錢借りに來たら、貸せんとボロ糞に云ふておいて、嬶やつたら五十錢貸そか、ハヽア、こら少と怪しいぞ」
「そら何を云ふね、お前はヅボラ者やがお前所のお咲さんは、女でこそあれ義理の固い物事に心得のある人やよつて貸そと云ふのぢや、ゴテ〳〵と云ふ事はないこれを持て歸に」
「ヘエ……嬶借て來た」
「借て來てやつたか、それを持つて横町の魚屋へ行つて、何んぞこれと思ふ様なお頭の附いたものを見はかろうて買ふといなはれ」
「矢張り女やわい、偉そうに云ふてもあかん、腹がペコ〳〵に空いて居るのに魚を買ふて喰ふて腹が膨れますかい」
「家で食るのやない、横町のお家主さんの若旦那がお嫁御を貰ふてやつたさかい、お祝を持つて行つてみなはれ先方さんははりてや、御祝儀の五十錢位い包んでくれてや、そしたら隣へ三十錢返して